

[活動年度] 2019 年度 - 2021 年度

OPI の認知度向上と参加しやすい研究会を目指す

—外部との連携強化、定例会のオンライン化等の取り組みを通して—

世良 時子 (2019-2021 会長)

1. はじめに

2019 年 4 月、新しい運営委員での研究会運営が始まりました。最初の定例会が記念すべき第 100 回で、それまでの研究会の方々が支え、紡いで来られたものを、より良い形に繋いでいかなければと、気が引き締まる気持ちだったことを思い出します。最終的に 3 年度にわたって、高木副会長をはじめとする運営委員の皆さんと共に研究会運営を進めてきましたが、チーム・ワークのありがたさを感じる 3 年間でした。

2019 年からの体制では、以下の 4 点を活動方針として決めました。

1. さまざまな立場の会員にとって、より有益な学びの場となることを目指す
2. テスターの技術維持・向上と資格継続に役立つ場とする
3. 日本語 OPI の認知を広め、ニーズに応えられる準備をする
4. 参加しやすい研究会にする

また、この 2019 年からの 3 年は社会的に大きな変化のある時期でした。まず、2019 年 6 月に日本語教育の推進に関する法律が閣議決定されました。それに伴い、現在の「日本語教育の参照枠」につながる「日本語教育の標準（仮）」の策定に関する議論が始まりました。翌 2020 年、まだ年度中でしたが、COVID-19 による大きな社会変化が起これ、それは教育の現場にも多大な影響を与えました。渡航制限による留学生の減少、オンライン授業への移行等々、教育現場の混乱の中で、多くの方が知恵を絞り、コロナ禍を何とか乗り切ろうとした 1 年でした。2021 年度は、多くの現場で対面授業が再開されていたと聞きますが、まだコロナ禍が明けたとは言えない状況でした。

このような 3 年間を振り返り、本報告では、第 100 回定例会、外部へ開かれた講演会の実施、定例会のオンライン化、ACTFL-OPI に関連する外部団体との連携・情報共有の 4 点について報告します。

2. 第 100 回定例会

第 100 回定例会は、永福和泉地域区民センターにてハイブリッドで開催しました。

100 回の記念に際して、牧野成一先生からお言葉をいただき、会長がそれを代読しました。外国人との共生と OPI、日本で働く人にとっての話す能力・読み能力の問題

等にも触れられ、2026年現在でも考えるべき点を多く示唆してくださっていました。

また、100回記念のパネルセッションを行いました。3名のパネリストを国内外からお招きし、うち2名についてはZoom参加という、その当時はまだ新しい形での実施でした。当時の韓国日本語OPI研究会会長の迫田亜希子氏、運営委員でベトナム在住の松浦真理子氏、JALP顧問で国際教養大教授の伊東祐郎氏の順でご登壇いただき、お話を賜りました。ハイブリッド開催という形態に加え、これからも連携し続けていきたい研究会の方々にパネリストをお引き受けいただき、かつ、海外とのつながりも考えることができた有意義なパネルセッションであったと考えています。

3. 講演会の実施

講演会は、日本語教育において注目されている諸問題を口頭能力の評価という切り口から考える企画を立てることを方針としていました。また、OPIの認知度を高めるために、公開の講演会を定期的に企画し、広く会員以外の方にも参加していただけるよう考えました。

2019年10月には、「移民時代の日本語口頭能力を考える-日本語教育施策とスピーキング・テストのこれから-」と題した講演会を実施しました。前半は、文化庁の増田麻美子氏から、これまでとこれからの日本語教育施策と日本語教育の今後の展望について、後半は東京外国語大学の根岸雅史氏から、英語スピーキング・テストを題材に話すことを評価することについてお話しいただきました。先述したように、社会的な変化の大きな時期で、多くの方に興味を持っていただきました。会員の皆さんに有益な知識を得る場であったのと同時に、会員以外の皆さんに講演での主たる情報に合わせてOPIという口頭能力を測る試験について知っていただく機会となっていることを願います。

これ以外にも、定例会では、JFS準拠ロールプレイテスト、学習者コーパスI-JAS、ICTツールを活用したオンライン外国語授業等に関する講演会も行いました。

4. 定例会のオンライン化

2020年2月の定例会・総会は、元々、会場を借りたハイブリッド開催を予定しており、1月末から参加申し込みが始まっていたのですが、世の中の情勢が急激に変わっていききました。そこで、まず、開催についてどのような可能性があるかを検討した上で、運営委員会のMLを通して相談し、全面オンラインでの開催を決定しました。2月下旬にオンライン開催への変更を会員にお知らせし、2月29日(土)に全面オンラインでの定例会を成功させることができました。混乱の中での素早い決定・実行ができた運営委員会のチーム・ワークに改めて心より感謝申し上げます。

成功の要因として、コロナ禍前から委員の皆さんが献身的に運営を支え、みんなで

学ぶ場を作るという目的のために細やかに働いてくださっていたことが挙げられると思います。会場設営・お茶の準備を率先してやってくださっていた滝川委員、ハイブリッドも、急遽、オンライン移行となった際も Zoom に不慣れな方へのサポートをしてくださった大隅委員、高橋委員、ウェブの移行にご尽力くださった畠山委員、清水委員、ほかにも本当は全員の方のお名前を挙げたいのですが、ここまでに留めます。日本語 OPI 研究会は日本語教育関連の団体において、いち早くオンライン対応ができた研究会でした。それを可能にしたのは、委員の皆さんの熱意とチーム・ワークだったと確信していますし、その後ろに会員の皆さんの支えがあったことは、言うまでもありません。

2020 年度が始まると、急速にオンライン授業の必要が増し、それぞれの現場で、混乱の中、学習者の学びを止めないように皆さんが苦勞なさっていました。また、より助け合いを求めている状況であるにもかかわらず、教員間の連絡の場は失われていきました。そこで、通常 10 月に行っている講演会を 8 月に前倒しし、「日本語 OPI 研究会オンライン茶話会～講師室のおしゃべりをオンラインで～」というイベントを行いました。OPI に限らず、オンライン授業での苦勞や工夫を共有する貴重な場となりました。対面のときからですが、研究会で、違う職場の人と会い、同じ方向性を持つ者同士での情報共有ができることは、大きな魅力であると言えます。

その後、2021 年度末までのすべての定例会は、オンラインで実施しました。オンラインによる不自由さもありますが、遠方や、家庭の事情によって対面参加が難しい方には、より参加しやすい形態であり、活動方針に沿った実施ができたと言えます。

5. ACTFL-OPI に関連する外部団体との連携・情報共有

ACTFL-OPI に関する団体としては、試験実施団体としての LTI のほかに、LTI の試験を実際に扱っている企業や団体が存在します。これまでも連絡を取ってきた社団法人 Global8 がそうです。しかし、2020 年、iGroup Japan という企業が ACTFL-OPIc 等を扱っているという情報を得ました。そこで、ウェブサイトから連絡を取ることで、担当者をつなぎ、日本語 OPI 研究会について、連携を取っていく団体だと認識していただくに至りました。2020 年度総会以降は、社団法人 Global8、iGroup Japan 双方と連絡を取り、テスト実施準備委員会からの報告として、会員への情報共有を行っています。また、2021 年度、iGroup Japan からは、会員に OPIc を知ってもらうことを目的として、特別価格での受験機会の提供をいただきました。

このような関連団体の情報は、いちテスターにはなかなか把握しづらいものであると言えます。同時に、更新等に関する ACTFL からの情報も、変化が激しく、わかりにくいものであることが続いていました。そこで、2020 年度と 2021 年度は総会開催時の定例会で「ACTFL や OPI の情報共有」という時間を設け、更新や外部団体の試験の

実態、アカデミック・アップグレードなどについて課題があることを確認し、ACTFLの年次大会の報告を聞きました。

残念ながら、ACTFLは、テスター個人とのやり取りが基本となっていて、研究会が団体として情報を得たいと申し出ても、断られています。テスター資格、ACTFLの会員資格とも関わるため、難しい部分はありますが、研究会が情報共有の場としての機能を果たしていくことは重要なのではないかと考えます。

6. 終わりに

2019年度からの活動について、第100回定例会、外部へ開かれた講演会の実施、定例会のオンライン化、ACTFL-OPIに関連する外部団体との連携・情報共有の4点を中心に報告してきました。これらの報告には、入れることができませんでした。毎回の定例会でのブラッシュアップセッションによって相互に研鑽を積むことが日本語OPI研究会の大きな魅力であることは言うまでもありません。常に学び成長しようとする会員の集まりであるこの研究会が、今後も歩みを続け、OPIに関わるテスター、教師、学習者等々へ良い影響を与えていける存在であることを願います。